イ） スズダケ型ブナ林

阿武隈山地上部の標高700～800 m以上の気候的極相とみられる。昭和35年頃までは，同山地の主峯である大滝根山の周辺に広大な優良林分の残存がみられたが，その後伐採の手が伸びて全部が消滅した。現在みられるものとしては，同山地北部の日山や花塚山のあたりに貧弱な二次林的なものが認められるに過ぎない。それでもなお同山地の上部の自然的特徴を指標するものとして貴重である。

ロ） チシマザサ型ブナ林

奥羽山地から越後山地にかけて広く分布する。越後山地ではなだれの来ない凸状地に断片的にみられるが，本型よりは後述のユキツバキ型がめだつ。一般に標高700～800 mより上の山地帯上部にみられるが，豪雪の越後山地では標高400～500 mまで下降する。奥羽山地や三国帝釈山地ではかつては連続的に分布したと思われるが，伐採が進んだ現在では断片的な拡がりを見せる。しかしなお尾瀬や燧ケ岳，会津駒ケ岳の一帯にはかなり優良な林分が広く残されており，極めて価値の高い自然地帯を形成している。

ハ） ユキツバキ型ブナ林

越後山地の豪雪の谷間を中心に分布する。この地方はなだれ多発地が多くブナ林の成立は概して困難であるが，なだれの来にくい凸状地とか，広い谷底平面を持つ谷などに断片的に成立する。浅草岳北東面の沼ノ平はこの点で注目される。この地方のブナ林の多くは林床にユキツバキが繁茂するユキツバキ型であるが，山頂近くや，主尾根上には前記のチシマザサ型もみられる。ここではチシマザサ型はむしろ地形的なものであり，気候的極相はユキツバキ型と考えてよいであろう。本型のブナ林は，只見川流域山地の，横田・大塩から奥只見湖の下にかけて見られる。尾瀬のブナ林はチシマザサ型である（ただし，湿原周辺の平坦部のブナ林林床はオゼ

図19 ユキツバキ型ブナ林（南会津郡只見町）
浅草岳南麓，ユキツバキは花糸が黄色で合着していない。